

## 13. 魔法の冒険

敦賀市立中郷小学校

4年 高橋 結愛      松原 綺梨      南谷 紗花

↓

各務原市立尾崎小学校

5年 森 聡子      松原 小夏      永縄 真由  
竹内 美月      平林 美里

私は菜の花ゆみ、小学五年生。勉強はそこそこだけど、運動は自分で言うのもなんだけどけっこうできる方だと思っている。放課後はいつもミニバスケットボールのチームで練習している。

バンバンバン。

ゴール下までドリブルして、そのままシュート！

ボールはリングの上をくるくると回ったあと、あみをゆらしながら下に落ちてゆく。

「ナイスシュート！」

チームメートが声を上げる。

今日もせっこうちょうのまま練習終了。練習の後にチームメートとおしゃべりをするのも大好き。お気に入りのスポーツタオルであせをぬぐい、家から持ってきたドリンクを飲みながらいろいろな話をする。クラスのこと、テレビのこと、お気に入りの歌、ちょっと気になる男の子のことなどなど。楽しい時間はあっという間に過ぎて、ママが車で迎えに来た。

「ゆみ！」

相変わらずママの声は大きな声！ 友達との話がもり上がっていてもママの声にはかなわない。私はもう少ししゃべっていたかったけれど、友達にじゃあねと声をかけて、

「は～い」

とママの乗る車にかけよった。

いつもは次の日にそなえて早くねる私、好きなバスケットを続けるためには、宿題をきちんとすること、早くねることをママと約束しているから。でも今日は金曜日、明日は学校もないし、バスケの練習も午後からだから、ひさしぶりに夜おそくまでお気に入りの歌を聞きながら、友達から借りた本を読んでいた。

カタッ。……あれ、窓は閉めたはずなのに……と思いながら、窓に近寄るとやっぱり少し窓が開いていた。窓を閉めようとしたとき、外に黒い影が。

「えっ、なに？」

のぞきこんだしゅんかん、

「今、見てしまったね。このすがたを見た者は、人間にしておくわけにはいかない」

という、女の声とともに強い光が私の目の前に広がった。

何がおこったのかしら。私はすきすきといたむ頭を抱えると……、なんだかいつもと違う。頭の上にはあるはずのないものが……。

「ええっ」

これは耳！　そういえばと思いながら頬をなでると、ちくっと感じるものが。これはひげ……。いったい私はどうなってしまったの。おそろおそろ床に落ちている鏡を見てみた。

やっぱり……。私はウサギの姿になっていた。ぼうぜんとしていると、私の姿を映していた鏡が突然光り出した。今度は何なのよ。

あまりのまぶしさに目を閉じた私、その私の頭、いえ耳を誰かがなでてくれた。

「えっ」

顔を上げると、女の人が立っていた。

「私の名前はローズ、あなたはさっきダークという魔女の姿を偶然見てしまった。だからうさぎの天使に姿を変えられてしまったのよ」

「そんなあ、こまるよ。私、こんな姿じゃ学校へも行けない」

「そうね。私が元の姿に戻してあげられるといいのだけど、ダークの魔力は強いから完全に戻すのは無理ね」

そういいながらローズは私の目をじっと見つめた。そしてにっこり笑いながら、

「良かったわね。あなたにはちょっとだけ魔力があるみたい。その力を使うと、少しの間だけ元の姿に戻れるみたいよ。やり方を教えてあげるわ」

そう言うと、ローズは人間に戻るための呪文や、困ったときにローズを呼ぶ呪文を教えてくれた。

それから二日間は、ローズと一緒に呪文の練習をして過ごした。大好きだったバスケの練習も休んだ。だって魔力を使うととても眠くなるし、疲れてしまうから。

でも、練習のかわがあって日曜日の夕方には人間の姿に戻れるようになった。

「良かった。月曜日には間に合いそう」

喜ぶ私に向かってローズは、

「でもあなたの魔力だと、一度の魔法で姿を変えることができるのはせいぜい五時間ね。魔法が消え始めると最初にひげが出てくるわよ。それから三分もたつと、完全にハッピーラビットの姿に戻っちゃう。だからその前に魔法をかけ直さないといけないわ」

まあそれでも、ずっとラビットの姿であるよりははるかにまし、と思いながら私はローズの話聞いていた。

「あっ、もうこんな時間！　実は私もあまり長くここにいることはできないの。明日からは自分の魔力を使ってがんばってみて。どうしても困ったときは、教えてとおり『ウィッチ・カム・ヒア』っていうのよ。それじゃあね」

「えっ、ちょっ、ちょっとまってよ」

ローズは私の言葉も聞かずに姿を消してしまった。

月曜日から、私はハッピーラビットの姿をみんなに見られないように、慎重に生活をした。といっても、ひげがぴんぴん出始めたらトイレへ行って魔法をかけ直すだけだから、そんなに大変ではなかった。

私は朝、目が覚めたときはハッピーラビットの姿だから、起きたらすぐに魔法をかけて姿を変えるのだけど、ある朝、学校へ行くときになってハッピーラビットの姿に戻ってしまった。

「おかしいわ。まだ魔法をかけてから一時間ちょっとしか経っていないのに」

私は急いでローズを呼ぶことにした。

ローズは呪文を唱えるとすぐに姿を現した。そしていつものように私の目をじっと見つめて、

「魔力が弱くなっている。あなた毎日魔法を使っているのに、きのうは早く寝なかったでしょ。魔力と体力はとても関係あるのよ。体を休めないと魔力は戻らない」

「でも、これから学校へ行かなきゃ。ローズどうにかしてよ」

「仕方がないわね、今日は私が姿を変えてあげる」

そう言ってローズは私を人間の姿にしてくれた。

この日は最悪だった。だって授業中にひげがぴんぴん出始めて姿が変わりそうになったから。私は先生が黒板に文字を書いている間に、気づかれないように教室を出て、急いでトイレへ行き、ローズを呼んだ。

ローズはすぐに姿を現して、私を人間の姿に戻してくれた。でも、あれ、なんか変。いつもは私の目をじっと見つめるのに、今回のローズは私を人間の姿に戻したらさっさと姿を消してしまった。なんだか前に会ったときにくらべてローズは疲れているみたいに見えた。そんなことを気にしながら、トイレを出てろう下を歩いていると、

「ゆみはどこへ行った」

という先生の声が聞こえた。まずい教室を抜け出したことがばれちゃった。私は急いで教室へ行き、

「ちょっとトイレへ行っていました」

と言うと先生は、

「今度からは、行く前に先生に伝えるように」

と不機嫌そうな顔をした。それができたらこんな苦労はしないよ。

次の日も最悪は続いた。朝の魔法はうまくいったのだけど、昼にかけ直す魔法がうまくいかない。急いでローズを呼んだら、ローズが現れた。でも様子がなんだか変。とてもおこっっていて、私の顔を見ようともしない。私はおそろおそろローズに声をかけた。

「ローズ、どうしたの」

ローズは横を向いたまま答えた。

「別に」

「でも、いつもと違ってわたしをみてくれないよ。わたし何かローズがおこるようなことをしたの」

「あなたにはおこっていないわ」

「なら、どうして？」

ローズは訳を話してくれた。きのうの夜ダークとけんかをして、ローズは魔力がほとんどなくなり魔法が使えなくなったことを。

そんなあ～、どうしよう。★

そこで、私はローズと作戦会議をひらいた。

まず、ローズにダークの居場所を教えてもらった。その場所はだれも知らない魔女の館。そこへ行くには新たなじゅもんが必要なのだ。

私はなんだかきん張してきた。それから私とローズは、じゅもんの練習を何回もくり

返した。じゅもんは思ったよりもむずかしかった。

「ウェルカム・ハウス？」

「ちがう、ちがう、『ウェルカム・ウィッチ・ハウス』だよ～」

それから三十分後、私はやっとじゅもんが唱えられるようになった。

「やっと言えたあ！」

「じゃあ、これをあげる」

ローズがくれたのは、魔法のつえとペンダントだった。

「このペンダントに、七つのかけらをはめると魔力がよみがえる。しかし、一番魔力が強い七色のかけらはダークが持っている。だから、ダークと戦わないと私の魔力もかいふくしないし、あなたも人間の姿に完全にもどれなくなる」

「……分かった。私、がんばってみる」

「じゃあ、二人で力を合わせてがんばろう」

『ウェルカム・ウィッチ・ハウス！』

そのとたん、私の目の前に光が差しこんだ。

「ま、まぶしい！」

「今、魔女の館に向かっている途中だわ」

すると、一瞬にして辺りが真っ暗になり、さっきまでの光がうそのように消えてしまった。

「ローズ、もしかしてここは……」

「そうよ。私たちは魔女の館にいるのよ」

「こ、ここが、魔、魔女の館～～！？」

私が、予想していた世界とは、まったくちがひ、明かり一つない真っ暗な世界だった。

「あっ、一つ言い忘れてたけど、あなたが持っている魔法のつえは、三つのボタンがある。一つ目は青のウォーター、二つ目は赤のファイヤー、三つ目は黄色のサンダーよ」

「え？ ウォーター、ファイヤー、サンダーってなに？」

「ウォーターは水、ファイヤーは炎、サンダーは雷。戦うときに、必要なボタンを押せば、そのアイテムが出てくるわよ」

「じゃあ、かけらをさがしに行こう」

十分後……。

「あ、赤色のかけらがあった！」

三十分後……。

むらさき、青、水色のかけらが、がけにはさまっていたり、火山のふん火と一緒に落ちてきたりした。

「四つかけらが集まったね。あと三つね」

ローズはそう言った。

「私、ちょっと疲れてきた。休んでいい？」

「じゃあ、五分休もう」

五分がたって、またかけらをさがし始めた。でもいっこうにかけらは見つからない。すると、カサカサと音がした。音がする方へ近づいてみるとこうもりがいた。

「オイラ、デビル・バッド！ ダークサマノメイレイデ、オマエラヲ、タオシニキタ」

「ゆみ、魔法のつえを使って！！」

「何のボタンを押す？！」

「サンダーボタンよ」

私はサンダーボタンを押した。

「サンダービーム！！」

ビリビリビリ！！

「う、う、う……オマエ、ナカナカヤルナ……。ダガ、コンナコウゲキナンカ、オイラニハ、キカナイゾ！！ ツギハ、コッチカラダ。バッド・デビル・ビーム！！」

「キャ～、痛い！」

「ゆみ、がんばって！ もう少しよ」

「う、うん」

私は、ファイヤーボタンを押した。

「ファイヤービーム！！」

ポォーーーーーーーーーーーー！！

「ウギャ～～～」

「マ、マイッタ！！ ヤメテクレ～」

デビル・バッドから取ったのは、紺色と濃いピンク色だった。

「これで六こそろった！」

「あとは、ダークと戦って七色のかけらを、とりもどすだけね」

私は精いっぱい力をふりしぼってがんばろうと思った。

「あの前に見えるおしろは、ダークのおしろよ」

私はおしろの前に立って、ダークに負けるわけにはいかないと決意した。

「フッフッフ、よく来たなおまえたち。だが私に勝てるとも思っているのか？ どこからでもかかってこい！」

「ファイヤービーム」

「そんなものきかないぞ」

「それじゃあ、サンダービーム！！」

「うっ、なかなかやるなあ……。それでは、デビルファイヤービーム！」

「ウォータービーム！！」

デビルファイヤービームとウォータービームが真ん中あたりで大玉のようにぶつかり合っている。ローズは二人の戦いを見ていた。

「ゆみに、こんな魔力があったなんて……。ウソみたい……」

するとゆみのウォータービームが、だんだんデビルファイヤービームを押しながら、ダークのほうに近づいていく。

ついに、ダークに直げきした。

ドカーーーーン！！

「ギャアアア……」

ダークは、その場でバタン！ とたおれた。

カタン。

「ん！ 何か音がしたような……」

とローズが言った。

「あっ！ あれは……」

「七色のかげら！！」

と二人は同時に言った。そして、七色のかげらを最後にはめた。かげらが全部そろったとたん、虹色に光った。

ピカーン。

ローズの魔力が完全に回復した。ゆみも人間の姿にもどることができた。

するとダークが申しわけなさそうに、

「ロ、ローズ、この前はゴメン。許してくれ」

「うん！ いいわよ。私こそゴメンね」

ゆみは一安心。

「ゆ、ゆみ。うさぎの姿に変えてしまってゴメンね」

ダークがゆみにあやまった。

「いいよ。でも、すごく大変だったんだから」

私には、かすかに聞こえた。

「ゆみ、今までありがとう。さようなら……」

私は今日も元気に学校へ行く。

先生が言った。

「ゆみ、おそいぞ！」

「すいません！」

今日はなんだか時間が早く過ぎたような感じがした。

放課後、いつものようにミニバスケットボールのチームで練習している。

バンバンバン。

ゆみは思った。あの時の出来事は現実だったのか、夢だったのか。

今でもローズとダークの言葉は忘れない。

ゆみは空に向かって、

「ローズ、ダーク、さようなら」

とささやき、ほほ笑んだ。